

氏 名	藤 岡 喜 愛 ふじ おか よし なる
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 366 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	ロールシャハ・テストにおける側頭葉てんかんの特徴

論文調査委員 (主 査)
教 授 村 上 仁 教 授 井 上 章 教 授 半 田 肇

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、側頭葉に異常脳波を検出したもので、臨床症状において精神運動性発作を主とし、他系の精神病的症状を特にみとめないもの、という条件にあてはまる資料のロールシャハ・テストによる研究である。

資料は、男性例14、女性例7、計21例。テスト時の年齢は、16才から47才、平均年齢31.0才である。資料例はすべて加療中のもので、初発年齢は3才から42才、症状発現後の経過年数は1年から38年にわたる(第1表)。また、病因的には大部分が症候性である。

資料群(以下 EP 群と称する)の主要代表値は次のようになった。

$R=28.8$, $W\%=44.2$, $D\%=42.6$, $Dr, dd\%=5.6$, $F\%=50.4$, $M=2.6\%$, $\Sigma C=3.6$, $A\%=50.5$, 不良形態反応 $\%=17.4$, 体験型はC型が優越し48%であった。(第2, 3表)

数量的結果においては、EP 群の特徴は R の多いほか、CF, ΣC , 濃淡反応, 不良形態反応等の多いことにあらわれ、図版Ⅱにおいて colour shock をみとめ、IXにおいては Fi 反応が目立った(第4表)。特に色彩に対して敏感に反応し、情緒不安定で知能効率の低下をきたしている神経症類似の状態がみとめられた。この結果は、諸家が、てんかんにおけるひとつの類型としてみとめている、外拡型一症候性一神経症的な型に一致する。

指標的考察では、EP 群は、外界への適応への努力があるにもかかわらず、明確な対象把握が不全であり、自信のなさや自己の障害の自覚になやむという状況にあるものと考えられた。また EP 群について指標価値の高かった Perplexity, および Impotency, Body image, Perseveration, Blot 分割不能および Lien であった。また著者の観点からする Vagueness, 言語的困難も、上の指標と重なるものではあるが、有効であった(第5表)。

EP 群の典型例と思われる原資料を提示した。また、典型例とは異なると思われる類型を検討した。EP 群内において、典型例と同類型と思われたのは33%, 非定形性精神病類似の印象を生ずる類型29%,

精神薄弱の印象を生ずる類型29%，軽度の神経症にすぎないような印象の類型10%，を認めた。

著者が別に論じた，ロールシャハ反応における認知機能と吟味機能の協同という観点から，側頭葉てんかんは，吟味機能亢進の状態にあるものとして，諸家の指摘する極貧型てんかん類型に対し，感覚過剰の極にあるものとして位置づけることができる。

論文審査の結果の要旨

藤岡は側頭葉に異常脳波を検出し，臨床的にも精神運動発作を示す症例21例につきロールシャハ・テストを施行し，その結果を分析した。

その結果は，数量的には R が多く，CF， Σ C，濃淡反応，不良形態反応が多いことが特徴的で，特に色彩に対して敏感に反応し，ある種の神経症に類似した状態が認められた。これは諸家がてんかんの一類型として記載している外拡型—症候性—神経症的な型に一致する。

指標的には，本群では Perplexity, Perseveration, Blot 分割不能, Body image, Lien などが指標価が高いことが認められた。

上述の特徴が明瞭に認められる典型例は，症例の33%を占め，その外非定型精神病類似の印象を与えるもの，精神薄弱に近い特徴をなすもの各29%，軽度の神経症と区別できないもの10%があった。

また藤岡は，ロールシャハ反応における認知機能と吟味機能との関連という彼の理論から，上記の結果を，側頭葉てんかんの特徴は吟味機能の亢進による感覚過剰の極にあるものとして位置づけられるとした。

以上により，本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。